

『基督教世界』における錦織久良

— 宗教文芸家から銃後の婦人へ

岩田三枝子

序

錦織久良（1889-1949）は、キリスト者文芸家であり、女性運動家でもある。長岡女子師範学校時代に友人を介してキリスト教に出会い、その後伝道者を志して共立女子神学校で学んだ。錦織は、同校在学時代から『基督教世界』¹や日本基督教婦人矯風会（以下、矯風会）機関誌『婦人新報』に、短歌や廃娼論等の女性問題への提言を寄稿する。さらに40代に入った頃から、会員数300万人以上とされる全関西婦人連合会（以下、全関西）の政治・法律部の委員長となり、毎年の大会では10年以上にわたり司会を務め、また全関西機関誌『婦人』でも女性を取り巻く課題について提言や解説など30回以上の稿を寄せた。また組合教会連合婦人会常務理事も務めていた²。錦織がキリスト者文芸家として、また女性運動家として活動した1930年代は、軍国主義が濃くなる時期であった。

錦織に単独で焦点を当てた先行研究は管見の限り、前号における拙論「日本基督教婦人矯風会機関誌『婦人新報』にみる錦織久良の廃娼論」³がある他は、いくつかの研究で簡略な人物紹介があるのみである⁴。

1 『基督教世界』は、1883年、浮田和民、小崎弘道らによって発刊された『東京毎週新報』が起源であり、その後、『基督教新聞』と改題（1884年）、さらに『東京毎週新誌』と改題（1900年）を経て、組合教会の一つの機構である基督教世界社から『基督教世界』（1903年）として発行されるに至った。戦時下において、ナショナリズムの傾向を前面にした論考が目立った。茂義樹「1930年代のキリスト教ジャーナリズム—『基督教世界』の場合」（『キリスト教社会問題研究』25号、同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会、1976年12月、47-82頁）参照。

2 『基督教世界』2876号、1939年、5月11日、8頁。

3 岩田三枝子「日本基督教婦人矯風会機関誌『婦人新報』にみる錦織久良の廃娼論」（『キリストと世界』33号、東京基督教大学、2023年、37-69頁）

4 例えば、鈴木裕子編『日本女性運動資料集成 索引』（不二出版、1998年、168-169頁）に半ページほどに渡って錦織の生涯概略、また竹中勝男『福音の社会的行者』（日本組合基督教会事務所、昭和12年、170-171頁）に人物紹介が掲載されている他、賀川ハルの

一方で、戦争下におけるキリスト教界およびキリスト者たちの体制への迎合については、多くの諸研究によってすでに言及されている⁵。女性としてもキリスト者としても波乱の時代に、キリスト教界内だけではなく、キリスト教の枠組みを超えた一般の婦人運動で30年以上にわたって中心的な役割を果たしつつキリスト者として生きた一女性の活動の動機や女性問題への眼差し、またキリスト教信仰のあり方は、昭和初期から戦間期のキリスト教およびキリスト教女性運動を考察する上でも貴重な材料になりうると考える。

筆者は前号の拙論で、矯風会機関誌『婦人新報』における錦織の各論を検討し、錦織の活動の主に初期にあたる各論から、錦織のキリスト教信仰と女性運動の活動の原点を明らかにした⁶。本稿ではその続編として、錦織の執筆活動の主に中期にあたる『基督教世界』での各論を中心に錦織の信仰観と女性観の一端を検討しつつ、宗教文芸家としての錦織が、1930年代後半以降、戦時体制の中で次第に銃後の婦人としての自覚を持つに至る過程を明らかにしたい。

I. 執筆の背景

1) キリスト教との出会いから共立女子神学校へ

錦織は1889年、新潟県佐渡市に北見久良として生まれた⁷。錦織自身の回想によれば、長岡女子師範学校時代⁸に、長岡組合教会に通う友人の誘いで教会に足を運

友人であったことや、またハルが中心となって活動していた覚醒婦人協会（1921-1923年頃）でも活動をしていたことから、岩田三枝子『評伝賀川ハル—賀川豊彦とともに、人々とともに』（不二出版、2018年）や、永渕朋枝「藤村発行『処女地』に執筆した織田やす—覚醒婦人協会との関わり」（『神女大國文』（27）、神戸女子大学国文学会、2016年、38-57頁）の中で、わずかにその名が触れられている。また、ハルとの関係から、三原容子編『賀川ハル史料集』第1巻—第3巻（緑蔭書房、2009年）及び岩田前掲書の中に、錦織からハル宛の私信2通（1927年5月26日、1928年5月16日）が所収されているのみである。

5 例えば、「教会と政治」フォーラム編『キリスト者から見る〈天皇の代替わり〉』（いのちのことば社、2019年）や松谷好明『キリスト者への問い—あなたは天皇をだれと言うか』（一麦出版社、2018年）等。

6 岩田、前掲論文、37-69頁

7 誕生日は12月18日で、本籍は佐渡郡河原田町大字河原田本町。（日本キリスト教団長岡教会『長岡教会百年史』日本キリスト教団長岡教会、1988年、122頁）

8 錦織が長岡女子師範学校に入学したのは、1906年に新潟県女子師範学校から長岡女子師範学校に改称した年の前後だっただろう。新潟県長岡女子師範学校『新潟県長岡女子師範

んだが、「大の仏教信者である父に由って（中略）育つた私であつたから、世の中で私が一番嫌ひなものは『耶蘇教と蛇』であつた」錦織は、「『此分で進んだらいやおうなしに洗礼受けさせられてしまふ』と逃げ出してしま」⁹い、その当時はキリスト教に入信することはなかったという。

錦織の自伝的小説とも考えられる小説「嬌風小説 鬻體の告白」¹⁰や錦織による短歌などから総合的に推測すると¹¹、長岡女子師範学校を卒業後、佐渡に帰郷して教師をしていた頃に、父親が芸者を囲う生活をしていることに葛藤し、母親が亡くなる苦悩の中で22歳頃にキリスト教の救いを見出し、1911年5月21日に佐渡教会にて小野村林蔵より洗礼を受けた¹²。その後、1917年に錦織貞夫と結婚し天満教

学校一覧 大正7年5月』（大正7年、4頁）、及び新潟県長岡女子師範学校編『創立四十周年記念誌』（新潟県長岡女子師範学校校友会、昭和15年、59頁）参照。

- 9 錦織久良子「忘れ得ぬ人々」（『基督教世界』2859号、1939年1月12日、7頁）。長岡組合教会米山貞次郎牧師が「死んだのを幸としてとうへ教会を逃げ出してしまつた」との記載もある。米山が死去したのは1908年1月31日であるため、この前後に長岡教会に足を運んでいた時期があったと推測される。米山貞次郎（1869? - 1908。長岡教会在任期間1898年6月27日 - 1908年1月31日享年38歳）（日本キリスト教団長岡教会『長岡教会百年史』日本キリスト教団長岡教会、1988年、110-111頁）。
- 10 『婦人新報』1916年11月から1918年1月の期間、共立女子神学校卒業を挟んで通算12回連載されている。
- 11 小説「鬻體の告白」の主人公・浦子と錦織久良との共通点等の詳細については、岩田前掲論文を参照。
- 12 1931年の『基督教世界』には「受洗廿年」と題した歌を発表している（『基督教世界』2471号、1931年6月11日、4頁）。「佐渡キリスト教会史年表」（『佐渡教会120年史』日本基督教団佐渡教会、2017年、11頁）によれば、小野村林蔵は1910年6月に東京神学社を卒業して佐渡教会に赴任、翌年の1911年4月に按手礼を受け、6月21日には和歌山教会に転任している。錦織の洗礼は、小野村が佐渡に赴任していたわずか1年間の期間のことであつた。後年、錦織は小野村について次のような歌を残している。「神を主と 謝して我をば導ける 恩師小野村先生に謝す」「神なくば 我は世になし 天父に謝す 今日ある生を先生に謝す」（錦織くら子「受洗満二十年に際し恩師小野村先生に捧ぐ」『福音新報』1861号、1931年5月14日、10頁）。岩田前掲論文の注34「小野先生」は「小野村先生」の誤り。

会¹³に籍を移すまでは佐渡教会に籍があった¹⁴。

1914年、錦織は横浜の共立女子神学校に入学した¹⁵。ここでの同級生に、賀川豊彦の妻である賀川ハル（1888-1982）（以下、ハル）がいた。夫豊彦が単身米国留学の同期間、ハルもまた単身で共立女子神学校に在学していた。後にもみるように、同校卒業後も錦織とハルとの交流は続く¹⁶。

共立女子神学校での神学教育は、その後の錦織の人生にどのような意義や影響があったのだろうか。第一に、同校設立に関わる宣教師たちを派遣した米国婦人一致外国伝道協会（The Woman's Union Missionary Society of American for Heathen Lands、略称 WUMS）が、女性だけの宣教団体として、監督教会、長老教会、会衆派、オランダ改革派教会、メソジスト派、バプテスト派といった多岐にわたる教派から宣教師たちを派遣していたことから、同校の超教派的雰囲気と、宣教への熱意の大きさが特徴として挙げられる。錦織もそのような雰囲気の中で、多様な教団教派の女性キリスト者たちとの出会いを経験しただろう。また女性が中心となって運営される学校の様子は、女性の活躍の可能性への希望を錦織に感じさせたのではないだろうか。

第二に、共立女子神学校のカリキュラム上の特徴として、祈りと宣教実践が重んじられ、かつ、教会だけではなく、刑務所、孤児院、慈善学校、慈善病院、少年院

13 錦織貞夫（1890-1970）。長崎市出身で、日本組合基督教会牧師。1916年同志社大学神学部を卒業。1921年5月から1925年3月頃までアメリカのオベリン大学に留学している。錦織貞夫の著書は、『宗教教育研究叢書』（日曜世界社、1926年）：『宗教童話集』（日曜世界社、1930年）、『基督教童話・説教集』（日曜世界社、1938年）、『聖書の常識：基督教聖典旧新約聖書概説』（堀書店、1947年）等。錦織貞夫は1917年1月19日の教会定期総会にて伝道師としての招聘が決定されているが、翌年1918年1月18日の教会定期総会で早くも辞任が承認されている。（天満教会百年史刊行委員会『日本基督教団天満教会100年史』日本基督教団天満教会、1971年、40-42頁）

14 日本キリスト教団長岡教会、前掲書、122頁。さらに1939年当時の記録では、錦織の教会籍は「南大阪教会」となっている（『基督教世界』2876号、1939年5月11日、8頁）。

15 共立女子神学校は1881年9月、偕成伝道女学校として設立され、1907年2月、共立女子神学校と改称した。共立女子神学校の歴史、及びプラットに関して、次の文献を参照。「横浜共立学園資料集」編集委員会『横浜共立学園資料集』横浜共立学園、2004年、704-755頁、及び「VI 永遠のひかり—共立女子神学校の歩み」（『横浜共立学園120年のあゆみ』編集委員会『横浜共立学園120年の歩み』横浜共立学園、1991年、243-266頁）。

16 例えば、賀川ハルへの私信や、ハルの日記（1923年10月29日、1928年3月8日、3月24日、5月19日、11月1日、11月7日等）からは、錦織との交流の様子が伺える。

といった、教会外の地域社会の領域にも活動を広げていた点がある。このような地域社会における活動は、その後の錦織のキリスト教の枠組みを超えた女性活動にもつながるものと考えられるだろう¹⁷。

第三に、共立女子神学校が矯風会の拠点の一つであった点である¹⁸。錦織にとって同校で矯風会に出会ったことが、卒業後の女性運動への直接的な取り組みへとつながったといえる。

以上のような、宣教と地域社会における実践的活動の情熱を持つ多様な教団・教派、また国籍・文化を越える女性キリスト者たちとの共立女子神学校での出会いは、その後の錦織にとって、キリスト者としての自覚を持続けることと、また女性運動への動機づけとなった可能性が高いだろう。

2) 『基督教世界』執筆時代

錦織は1917年に共立女子神学校を卒業した。『基督教世界』では、1917年8月までは「北見」姓だが、9月からは「錦織くら子」として短歌を発表している¹⁹。組合基督教会の天満教会で伝道師をしていた錦織貞夫と結婚したのはこの頃だろう。その後、錦織は二児の母となった。

夫が1921年から25年まで北米オベリン大学に単身留学中、錦織は石井十次が設立した大阪の愛染園内に長男²⁰とともに生活をしていたようだが²¹、この期間は、後の婦人運動への発展を予期させる期間ともなる。

17 岩田、前掲書、111-122頁

18 錦織と共立女子神学校での矯風会の出会いについての詳細は、岩田前掲論文を参照。

19 矯風会機関誌『婦人新報』の寄稿でも、1917年9月まで「北見」姓だが、10月以降は「錦織」姓となっている。

20 錦織くら子「生の歓喜」(『基督教世界』1820号、1918年8月29日、5頁)から、1918年に長男が誕生したと推測できる。

21 三原、前掲書第1巻、400頁。その他、共立女子神学校時代の同級生であったハルの1923年10月23日の日記には、「錦織姉が病気であるので大阪の愛染園に見舞に行く」ともある。「細民窟の四ケ年(上)」(『基督教世界』2170号、1925年7月23日、6頁)、及び「細民窟の四ケ年(下)」(『基督教世界』2071号、1925年7月30日、8頁)、また同年12月に「細民窟に光るクリスマスの星」(『基督教世界』2190号、1925年12月10日、6頁)として愛染園の滞在時の思い出と思われる随筆が寄稿されていることから、この4年間を愛染園で過ごしていたことが推測される。

第一に、賀川ハル、長谷川初音²²、織田やす²³が中心となって設立した労働者女性の権利擁護のための団体である覚醒婦人協会への入会である²⁴。覚醒婦人協会機関誌『覚醒婦人』には、錦織の入会の記録がある他、同協会の演説会では錦織も演説も行っている²⁵。さらに、同協会の大阪支部が錦織の住んでいた愛染園に置かれていたことから、錦織も精力的にこの協会の活動に取り組んでいたことがわかる²⁶。1923年の関東大震災を機に覚醒婦人協会の活動が休止になったが、1927年の錦織からハル宛の私信に、「覚醒婦人のことを思ふと、今でも涙が出るので成るべく思はない様、――とつとめております。しかし復活の機運にでもなつたらいつ何時なりとも第一番に傘下に走せ参じます」と記し²⁷、同協会の活動が終息したことを無念に思い、会の再開を願う気持ちが伺える。

第二に、この時期、錦織の40代以降の活動の中心となっていく全関西との関わり

-
- 22 長谷川初音(1890-1979)。1912年にキリスト教の洗礼を受けた。1920年9月から1941年まで神戸女学院にて国語、聖書を教え、神戸松蔭女学院でも教鞭をとっている。1935年には日本組合基督教会初の女性牧師となり、芦屋浜教会、六甲キリスト教会などを設立した。また、灘神戸組合家庭会など、組合活動にも力を注いでいた。著作には、『いちじく(牧師の手記)』(芦屋浜教会、1959年)があり、また1954年版『讃美歌』426番「ほがらかに」や437番「子をおもう」の作詞もある。さらに、平塚らいてうらが立ち上げた新婦人協会の機関紙『女性同盟』にも、「男女共存のために婦人参政権を」(『女性同盟』6号、1921年3月、6-9頁)や、「独言」(『女性同盟』11号、1921年8月、55-56頁)として寄稿している。
- 23 織田やす(1883-1947年)。1905年にキリスト教の洗礼を受けたのち、1911年から1917年まで神戸女学院で教鞭をとる。その後、渡米し、オベリン大学、大学院で聖書文学を専攻する。帰国後1920年から神戸女子神学校にて1928年まで旧約聖書を教える。河井道が1929年に恵泉女学園を開校した2年後の1931年、恵泉女学園国語科の教員を務めるが、その後カトリック教徒となり、1942年3月で恵泉女学園を離れた。恵泉女学園校歌の作詞者でもある。
- 24 覚醒婦人協会は、1921年、ハル、長谷川初音、織田やすが中心発起人となり、ハルの神戸の自宅を拠点として、女工の労働環境の整備など、女性の権利獲得のために講演活動、機関誌出版、ストの指導などを行った。特にハルは機関誌の編集作業の中心を担っていたと思われる。活動半ばであったが、1923年の関東大震災を機に賀川一家が東京に転居した後は、活動の形跡はなく、機関誌の発行も確認できないことから自然消滅したと考えられる。詳細は、岩田前掲書参照。
- 25 三原、前掲書第1巻、387頁等
- 26 『覚醒婦人』1922年2月28日号には、「新入会員」として「大阪市南・下寺町四丁目 愛染園内」の住所で錦織の名が記されている(『覚醒婦人』1922年2月号、8頁)。
- 27 錦織久良からハルに宛てられた1927年5月26日付け書簡(松沢資料館所蔵)。

りが始まっている。関東大震災の直後に開催された1923年10月の第五回全関西代表会に錦織は出席し、震災救援の必要性について発言している²⁸。

このように、『基督教世界』に投稿する頃の錦織は、共立女子神学校での学びに始まり、伝道師との結婚、出産、育児、夫の留学、さらには自らのリュウマチの治療²⁹と目まぐるしい時期であったが、キリスト者としてまた女性運動家としての歩みが確立されていく時代でもあった。

Ⅱ．錦織の『基督教世界』における執筆

1) 錦織執筆全体の概観

錦織の公表されている執筆は、250件以上³⁰あり、主に、キリスト教文芸作品と女性問題への提言に分類できる。

キリスト教文芸作品には、『基督教世界』におけるキリスト教的宗教童話や教会学校教案、また『愛の人 石井十次』（日曜世界社、1935年）や『新島襄先生：少年少女のため』（日曜世界社、1936年）などの伝記といった、キリスト教を題材とした児童向けの執筆になる。数多く発表されている短歌もまた、このキリスト教文芸に分類して良いだろう。先の『基督教世界』に加えて、『福音新報』³¹『新人』（新人社）、『母と子』（日本児童協会）、『天界』（東亜天文学会）などにも歌人としての短歌やまた選者として掲載されている他、夫と二児の家族の生活を題材として詠んだ歌集『六畳の王宮』（日曜世界社、1929年）³²、短歌と随筆を集めた『魂のささやき：歌と随筆』（日曜世界社、1934年）、選者としての合同歌集『星かげ：合同歌集』（日曜世界社、1940年）も刊行している。また、『開拓者』（日本基督教青年会同盟）

28 鈴木裕子編『日本女性運動資料集成 4巻』不二出版、1994年、595頁。同じ代表会にて賀川豊彦が「愛の飢饉」と題した講演を行っている。

29 錦織からハルに宛てられた1927年5月26日付け書簡（松沢資料館所蔵）の中でのリュウマチへの言及や、歌集には「リウマチスにて別府温泉療養の際」と但し書きをして数首が詠まれている。「病める身はくれなゐ丸の船房に 在りて運命のたはむれに泣く」「足きかぬ身の悲しさよみじめさよ 杖にすがりて湯の町を行く」。錦織くら子『六畳の王宮』日曜世界社、1929年、50頁

30 1回の投稿を1件、また著作は1件と数える。

31 植村正久が創刊した週刊新聞で、1931年から1942年まで発行された。日本基督教会の動向が掲載されている。

32 賀川豊彦がこの書の「序」を記し、錦織の歌集を推薦している。

などへの日々の生活を綴った寄稿、さらに『国際日曜学校級別教案』（日曜世界社）には、日曜学校の教案も寄稿している。全ての短歌や随筆が直接的にキリスト教の信仰に言及しているわけではないものの、錦織の信仰の視点が織り込まれている執筆も少なくない。

女性関連の執筆については、『基督教世界』にも6件あるものの、主な執筆先はむしろ女性団体の機関誌であり、矯風会機関誌『婦人新報』に公娼全廃を訴える執筆などが30件、また全関西機関誌『婦人』に家庭における妻と夫の平等を実現するための法案の解説など30件の寄稿がある³³。

2) 『基督教世界』における錦織の寄稿種別

『基督教世界』への錦織の執筆は現時点で161件確認でき、錦織の寄稿数全体の約3分の2程度を『基督教世界』が占めていることから、『基督教世界』が錦織の主な執筆先の一つであったことがわかる³⁴。

錦織の『基督教世界』への最初の寄稿は、共立女子神学校在学中の1916年10月に寄稿された「僧院の窓より」と表題のある短歌10首である。その後、1916年12月に「生の輝き」、1917年8月に「南海の夕」と題して、それぞれ短歌8首ずつがやはり同校在学時代作品として掲載されている。

錦織の『基督教世界』への寄稿数と種別一覧は、本論末に掲載の通りである。寄稿は1918年から急速に増加し、多少の増減はあるものの、1932年以降は、年に1-2回程度に激減していることが見てとれる。このため錦織が『基督教世界』に最も精力的に寄稿した時期は1918年から1931年であることがわかる。1918年は錦織が共立女子神学校を卒業し、錦織貞夫と結婚した翌年であり、夫を通して組合教会や『基督教世界』との関係性が強まったのかもしれない。1926年3月に次男が生まれ³⁵、二児の育児に多忙であったことと想像するが、1927年と1928年の寄稿が突出して多い。これは、留学していた夫も1925年には帰国し、生活が落ち着いた時期だったのかもしれないし、それまでに書き溜めていたものがあったのかもしれない。1931年までは比較的多くの寄稿があるが、その後は減少している。錦織

33 矯風会機関誌『婦人新報』における錦織の執筆については、岩田、前掲論文、37-69頁を参照。

34 歌の選者としての登場も1件として数える。

35 1927年5月の賀川ハル宛の私信には、「昨年三月に生れた次男が少し虚弱」とあることから、次男が誕生したのは夫が帰国後の1926年3月だろう。（三原、前掲書第2巻、113頁）

は少なくとも1930年の時点ではすでに全関西の政治・法律部委員会の委員長を務めており、1930年代以降は全関西に活動の拠点を移していったために『基督教世界』への寄稿が減少していったのだろう。

執筆の種別では、短歌が92件、キリスト教を題材とした創作物語が49件、その他の随筆や女性問題への提言が20件となっており、短歌の寄稿が圧倒的に多いが、創作物語や随筆、また女性問題への提言も決して少ない数ではなく、錦織にとって『基督教世界』は、歌人としての活動を中心としながらも、文芸家として幅広い分野にわたる活動の場であったことがわかる。以下、『基督教世界』に発表された執筆を中心に、錦織の信仰観及び女性観の一端を検討する。

3) 短歌と宗教文芸にみられる錦織の信仰観—1920年代

短歌：日常を詠む

主に1920年代半ばまでは、家族や知人、自然、社会情勢などを題材とした日常的な光景が短歌として多く寄稿され、錦織一家のこの頃の様子を伺い知ることができる短歌も多い。例えば、夫がアメリカのオベリン大学へ留学するために渡米した1921年には次のような短歌を発表している³⁶。

淋しさもはた嬉しさも悲しさも、神に委ねて船を見送る³⁷
絶えて見ぬ幾とせ振りの世界地図、広げて君が船の後追ふ³⁸

また同年8月の「留守宅より」には、「良人を彼地に送つてから既に三ヶ月」と断りが付けられ、夫をアメリカに送り出した後の「留守宅」のことだと推測できる。さらに、「秋なれや我が魂遠く幾千里、ミシガン湖畔を今日もさまよふ」³⁹では離れた夫を思う妻としての気持ちが詠まれ、その4年後には「君が船うかべて海は紅白の波立て、今磯に近づく」⁴⁰と、夫の帰国を喜ぶ気持ちが詠まれている。他には、「三輪車買へとて彼児は泣き止まず、クリスマスにと指切りをする」⁴¹と我が子を題材

36 本論での引用に際して、旧字体は、新字体に変更した。

37 錦織くら子「船を送りて」（『基督教世界』1957号、1921年5月12日、6頁）

38 錦織くら子「魂のささやき」（『基督教世界』1960号、1921年6月2日、4頁）

39 錦織くら子「たましひの歌」（『基督教世界』1980号、1921年10月27日、4頁）

40 錦織くら子「船を迎へて」（『基督教世界』2150号、1925年3月5日、6頁）

41 錦織くら子「水晶の塔」（『基督教世界』2032号、1922年11月2日、5頁）

としたと思われる短歌もある。

家族以外の題材では、当時の社会状況も詠まれる。「文明と世は開花して感冒すらも、世界的とはおかしからずや」⁴²は、世界的にスペイン風邪が流行し、日本でも感染者数は2300万人以上ともされている1918年のスペイン風邪を題材とした一首である。「地の震へ、紅蓮の焰、水の責め、血は血を洗ふ狂乱の秋」⁴³では、1923年9月1日の関東大震災を詠んでいる。錦織自身は関西在住のために地震には直面していないものの、甚大な被害の報道を見聞きしてのことだろう。また、「イエス釈迦唯一の神もみほとけも赤き鞭もて叩かるゝ世ぞ」⁴⁴では、当時の宗教界を取り巻く状況が題材となっている。1930年代前半に活発化した反宗教運動の一環として、1931年に日本反宗教同盟が結成された。背景には、1927年の金融恐慌や1929年の世界恐慌による経済的打撃により、寺院の社会的・経済的優位性に対して日本社会の中での不満が広がっていたことがあった。さらに、「君が計を聞きし瞬間この大地、二つに裂けし心地こそすれ」⁴⁵など、知人やまたその死を題材として詠まれた短歌も数首ある。

その他には、自然を題材とした短歌も多い。

神なしと君なほ言ふやこゝに来て見よ南海の夕ばえの空
聖手こゝに彼処に雲よ陽のいろよ詩篇十九を誦して讃ふる⁴⁶

「天は神の栄光を語り告げ大空は御手のわざを告げ知らせる」⁴⁷で始まる神の被造世界の壮大さを賛美する詩篇19篇になぞらえているように、自然を詠む短歌には、信仰の視点が反映されていることも多い。

以上の短歌からは、信仰者としての自覚を持ちつつ、家族や自然を愛し、社会を見つめようとする歌人としての錦織の眼差しを見ることができる。

42 錦織くら子「風魔の悪戯」（『基督教世界』1831号、1918年11月4日、6頁）

43 錦織くら子「狂乱の秋」（『基督教世界』2077号、1923年9月20日、7頁）

44 錦織くら子「反宗教同盟をうたふ」（『基督教世界』2486号、1931年9月24日、7頁）

45 錦織くら子「故木村夫人の霊に」（『基督教世界』2423号、1930年7月10日、7頁）。天満基督教会牧師木村清松の妻、木村亀井（1875年12月29日高知生まれ。14歳で洗礼を受ける。1902年清松と結婚。1930年6月27日没）。

46 北見くら子「南海の夕」（『基督教世界』1767号、1917年8月16日、8頁）

47 詩篇19:1（『聖書 新改訳2017』新日本聖書刊行会、2017年）

宗教文芸— 一信仰者としての生き方

1920年代後半は、「宗教文芸」として紹介されている短編物語が主な執筆となる。「創作」に分類される49件のほとんどがこの時期に寄稿されている。それらは全てキリスト教的内容を含んでおり、錦織自身の創作と思われる短編物語17件と、外国文学を要約して再話した32件⁴⁸の2種類に分類できる。

『基督教世界』で「児童説教」と題した短編物語の執筆が増加し始めるのは1926年以降であり、8歳頃となった長男やこの頃生まれた次男を思い浮かべつつの執筆作業であったのかもしれない。1926年には2件の「児童説教」、さらに翌年には19件の短編物語を寄稿している。なお、9月25日号以降は、主に外国の文学作品を短編に編集して再話したものを「宗教文芸」として掲載している。1928年には13件の「宗教文芸」に加えて、錦織による創作物語「救はるるまで」が9回にわたって連載され、これ以降には、短編物語の掲載はほとんどなく、1929年に1件、1930年に1件のみとなっている⁴⁹。

錦織自身の創作物は、全てがキリスト教信仰を明確に反映しており、「良い行い」を重視した内容となっている。例えば、「児童説教」の「光りを輝かせ」では、次のように語られる。(下線部筆者)

聖書に『汝等の光りを人の前に輝かせ』と、いふ言葉があります。西村忠一が、人の前に輝かしたエス様の光りによつて、神様を知らない人達が、天の父を崇める様になりました。私達日曜学校に来る子供達は、良い行ひをしてエス様の子供である証しをしなければなりません。⁵⁰

ここでは、「良い行い」が「エス様の子供である証し」に直接結び付けられている。また、「悪しき者に抵抗ふな(馬太五ノ卅九)(約翰伝三ノ三)」の創作では、「新しく生れ代はれば、人間はどんな悪人でも立派な人になれるのです』と、話されま

48 32件の再話のうち、1件のみ日本を舞台とした日本人による物語「宗教文芸 二二 佐藤實作 聖像に跪く処女」(『基督教世界』2301号、1928年2月16日、9頁)の再話となっており、他31件は全て外国の物語である。

49 宗教文芸には番号が付してあるが、時に番号が重複したり抜けている号もある。最後は(三十)の番号が付してあるが、発行日との兼ね合いからは、実際の寄稿件数は29件であると推測できる。

50 錦織くら子「光りを輝かせ」(『基督教世界』2200号、1926年2月25日、8頁)

した。それから虎吉等は、此話の様に日曜学校に来て新らしく生れ代つて立派な良い人になりました」⁵¹として、「立派な良い人」になることが模範とされている。また「水晶の石垣」では次のように記す。

『神様の聖旨を聞いて行ふ所、其処はどこでも天国でありエデンの園なのです』（中略）今度こそは熱心に日曜学校に行つて光らせ様、怠けて真黒い石になって悪魔の城の石垣になぞ決してならない様にし様と、一郎は堅く堅く決心いたしました 聖書に『悪魔に処を得さする勿れ』とあります。⁵²

ここでは、「怠けて真黒い石」にならないようにすることを目指すようにと導く。さらに、「花に現はれた三つの教訓」では、次のようにある。

いつでも、どこでも、誰れにでも神様のみさかえを現はさなければなりません、病人に花を送つて慰めるのも、気の毒な人に親切にするのも、貧しい人を賑してあげるのも、それは、いつでも、どこでも、誰れにでも、出来る事であります それが出来ないのは出来ないのでは無い、しないのです⁵³

ここでは「病人に花を送」るなどのいくつかの具体例を挙げ、やはり、他者への気遣いや親切などの良い行いが「みさかえを現は」す手段であるとされる。このように錦織の創作では、熱心に教会に通い、周囲の人々に親切にし、道徳的に良き人間になるように、という生活上の倫理的言動を促す言及が多い。

一方、錦織による外国文学の再話では、上記のような露骨な形での倫理的生活の推奨はなされてない。例えば「人は何に由て生きるか トルストキ」⁵⁴では、人は愛によって生きる、という結論で締めくくられており、その他には、「歓喜」を持って生きる大切さ（「パレアナ ポーター」⁵⁵）、悔い改めの必要性（「スカーレットレター

51 錦織くら子「悪しき者に抵抗ふな（馬太五ノ廿九）（約翰伝三ノ三）」（『基督教世界』2212号、1926年5月20日、8頁）

52 錦織くら子「水晶の石垣」（『基督教世界』2251号、1927年2月24日、7-8頁）

53 錦織くら子「花に現はれた三つの教訓」（『基督教世界』2263号、1927年5月19日、4頁）

54 錦織くら子「人は何に由て生きるか トルストキ」（『基督教世界』2283号、1927年10月6日、9頁）

55 錦織くら子「二六 パレアナ ポーター」（『基督教世界』2304号、1928年3月8日、8頁）

ホーソン」⁵⁶等々、物語の骨子をかいつまんでの再話となっている。ただし、社会におけるキリスト者の役割や信仰の意義といった視点ではなく、むしろ個人的な生活面や、周辺の身近な人々への親切を促すといったような、私的領域内への信仰の適用にとどまっている点では、外国文学の再話と錦織自身の創作とは共通している。

以上のことから、錦織による宗教文芸は、キリスト者としてどのような生活をすべきかの指針を示す明確な目的を持っているといえる。それらは、身近な周辺の人々への親切や配慮、日曜日には礼拝に出席すること、親の手伝いをよくすること、誠実に生きること、さらには愛や喜びを持って生きるように、といった個人的・私的な領域が関心の中心であり、そのさらに外に広がる社会全体における信仰の意義や役割といった視点はみられない。

4) 女性に関する提言にみられる錦織の女性観

『基督教世界』において女性に関する錦織の執筆は数自体は限定的ではあるものの、いくつかの提言をみることができる。1918年3月号「燈下独語」では、「婦人の地位」として、次のように主張する。

女子の人格が高まり、地位が進む事は甚だ望ましい事である、(中略) 我国に於ける現在婦人の地位は、只基督教界に於いてのみ、男子と平等に目せられてゐる事を断言するに憚らない⁵⁷

また、1920年にも男女平等への願いを詠む。

男いふ汝れは女ぞ低かれと 男兒高しと誰が定めけん⁵⁸

さらに1935年には「女性の純潔に対する社会への要望」で次のように記す。

今日の地位ある名望ある男子の蓄妾が当然とされて居り、結婚に際して女子の貞操のみ要求されて男子の無節操は何等問題でなく、甚だしきに至つてはお茶

56 錦織くら子「二四 スカーレットレター ホーソン」(『基督教世界』2302号、1928年2月23日、9頁)

57 錦織くら子「婦人の地位」(『基督教世界』1798号、1918年3月28日、9頁)

58 錦織くら子「空色の国」(『基督教世界』1920号、1920年8月19日、5頁)

屋遊び位出来ないやうな男は甲斐性なしとさへされる階級の存する事である（中略）凡ての点に道德の低下を示しつつあるが、なかんづく純潔問題に至つては、両性道德標準の低下は実に驚くべきものがある。⁵⁹

1939年には、民法において子の親権が父親のみに制限されていることに対して、子に対する母親の親権の拡充の必要性を次のように述べている。

近代文明の発達したる今日、斯うした制限は撤廃すべきものとして民法改正運動にたづさはる婦人運動団体はやつきとなつたものであるが、今回の改正民法案には此制限が全廃はされないが、余程緩和される事となつて居る事は婦人の能力も今迄よりは認められて来たものといつて良からふと思ふ。⁶⁰

これらの『基督教世界』における錦織の女性に関する提言の特徴として、次の二点が挙げられるだろう。第一に、女性団体内だけではなく、男性をも執筆者層と読者層に含む『基督教世界』を舞台として、男女の両方に男女の立場の平等を訴えていることから、より広範囲な読者層を意識している点に意義がある。

第二の特徴は、家庭内における女性の立場に着目している点である。例えば財産権や子供の親権等における家庭内での男女の立場の平等や、妻の側の貞節だけではなく夫と妻の双方に貞節が求められるべきである、とする主張は、同時代に活動した新婦人協会が政治的分野において女性の権利獲得を目指した点や、また賀川ハルらが中心となった覚醒婦人協会が労働環境において女性の権利擁護を目指した点とは異なる。新婦人協会や覚醒婦人協会では家庭の外側にある社会での女性の権利のための活動であったことに対し、錦織の主張は家庭内における男女の立場の平等である。このような錦織の特徴は、次にみるような、家庭内における女性の役割を強調する銃後の婦人の主張に賛同していった要因として考えうるだろう。

5) 「銃後の婦人」の自覚—1930年代後半以降

1932年以降、錦織は執筆の中心の場を『基督教世界』から全関西機関誌『婦人』に移す。その後、1930年代半頃までの『基督教世界』誌上での発表件数は少ない。

59 錦織くら子「女性の純潔に対する社会への要望」（『基督教世界』2666号、1935年4月4日、4頁）

60 錦織久良子「母と子の法律」（『基督教世界』2876号、1939年5月11日、4頁）

1932年には「母と子」という三田谷の歌集の紹介⁶¹、1934年に「蘇へる母の言葉」⁶²、1935年に「女性の純潔に対する社会への要望」⁶³、1936年に「伝道の旅」⁶⁴として伊香保への旅を題材とした短歌の執筆のみである。

1937年になると、『基督教世界』での発表数は再び増加に転ずる。1937年は、これまで錦織が発表の主な場としていた『婦人』が事実上廃刊となり、『婦人朝日』になったことが要因だろう。『婦人朝日』で組まれる特集や連載では、『婦人』時代に見られたような婦人問題への提言などの内容はほぼなくなり、ファッションや家事情報が中心となる⁶⁵。『婦人』での発表の場を失った錦織が、『基督教世界』に発表の場を戻したともいえるだろう。

1930年代後半の錦織による『基督教世界』での発表には、それ以前とは明らかに変化がみられる。それが、天皇制、国体に関わる内容である。その傾向は、1920年代後半からもわずかにあった。例えば、1927年には大正天皇の逝去に際して次のような短歌を寄せている。

天地に光りは消えて諒闇の、春は涙にくれてかしこむ⁶⁶

また、1928年には昭和天皇即位を祝う。

御大典国を挙げての祝ぎごとに 喜びの秋かがやきの秋⁶⁷

1930年代後半には上記のような日本の体制への賛同の姿勢がより顕著に現れるようになる。1938年に記す「連合婦人会の北支伝道（新伝道地に送るオルガンの

61 錦織久良子「『母と子』を紹介す」（『基督教世界』2518号、1932年5月12日、7頁）

62 錦織久良「蘇へる母の言葉」（『基督教世界』2620号、1934年5月10日、8頁）

63 錦織久良子「女性の純潔に対する社会への要望」（『基督教世界』2666号、1935年4月4日、4頁）

64 錦織久良子「伝道の旅」（『基督教世界』2726号、1936年6月4日、2頁）

65 例えば、創刊号では、「女性と社会（社会時評）」の記事が1編あるものの、その他は「グラフィック 雪と少女」「今月のレコード」「全国女学校のお自慢コンクール」「シンプソン夫人好みのスタイル」などファッションや趣味の記事が目次に並んでいる。『婦人朝日』1937年3月号（日本近代文学館編『復刻 日本の雑誌』講談社、昭和57年5月）

66 錦織くら子「諒闇の新年」（『基督教世界』2244号、1927年1月1日、1頁）

67 錦織くら子「御大典を祝して」（『基督教世界』2339号、1928年11月8日、2頁）

由来)」⁶⁸は、亡き娘のオルガンを寄贈した女性について述べた随筆があるが、ここで錦織が触れている北支伝道とは、日本組合基督教会による満州への進出のことである。日本組合基督教会と中国の関わりに関しては松谷曄介の研究に詳しく、それによると、日本組合基督教会では古屋孫次郎が1919年12月に上海に渡り、中日組合教会を設立していた。満州では1918年には19教会、1934年には41教会、1937年には49教会が満州に進出していたという⁶⁹。錦織の上記の執筆活動は、まさに満州での日本組合基督教会の成長が勢いを増す最中である。1938年には、第二回三教代表協議会で「北支布教に関して努力して頂きたい」と宣撫と文化工作の協力要請があったという。宣撫工作とは、「特務機関所属の宣撫班が担い、軍隊が鎮圧した村や町に入り、情報蒐集と偵察をし、地域の治安維持、住民への親日教育、医療活動、通訳、宿舎の斡旋、施薬等を行うこと」⁷⁰とされるが、北支における日本組合基督教会の伝道は、明らかにこの日本国軍による中国での宣撫と文化工作の一部といえる。しかし、錦織の視点は日本軍の政策には向けられず、関心はもっぱら「伝道」にのみ向いている。それが、錦織ら日本にいるキリスト者たち、また女性たちの関心の限界だったのかもしれない。

国家総動員法が制定された1938年には、「戦時経済と家庭婦人の役割」と題した投稿で、錦織は次のように「愛国」について記す。

一日に一家庭より二枚宛の古新聞を節約すれば之が総計七万五千円となり、一台の軍用機が献納出来る訳である。(中略) 戦闘機を製造するには一台十万円より十五万円かゝるといふ事であるが、此酒代を以てすれば実に戦闘機一万五千台を日本人は呑んで居るわけである。(中略)『愛国とは、只単に白エプロンに襷がけで万歳——と旗振るのみが愛国者ではない』といふ事である。此の国家未曾有の非常時局下に於て、国策を妨害するやうな婦人は銃後の婦人としての無資格者である。(中略) 消費節約といひ生活刷新といふも国家総力戦を以て長期建設に邁進すべき具体的実行である。(中略) いやしくも必勝を

68 錦織久良子「連合婦人会の北支伝道（新伝道地に送るオルガンの由来）」（『基督教世界』2807号、1938年1月1日、6頁）

69 松谷曄介『日本の中国占領統治と宗教政策—日本キリスト者の協力と抵抗』明石書店、2020年、148-150頁

70 島蘭進他『近代日本宗教史第4巻 戦争の時代 昭和初期～敗戦』春秋社、2021年、111-112頁

期して長期建設に邁進する銃後の婦人として、茲に我らに課せられたる役割に就て百の議論よりも一つの実行、よくそれ経済戦の戦士として最後の一戦迄戦ひ貫くべきでは無からうか。⁷¹

この文章には「軍用機が献納」「愛国者」「国家未曾有の非常時局下に於て、国策を妨害するやうな婦人は銃後の婦人として無資格者」「国家総力戦」「必勝を期して長期建設に邁進する銃後の婦人」「経済戦の戦士として最後の一戦迄戦ひ貫くべき」と体制に賛同する言葉が並び、錦織の銃後の婦人としての自覚が明確に示されている。

また、1939年「山陰伝道応援記」では、小学校の愛国婦人会、国防婦人会、倉吉町婦人会主催で錦織による講演「非常時における婦人の使命」が記されている⁷²。講演内容の詳細は記録されていないものの、タイトルからは、先の「戦時経済と家庭婦人の役割」と類似した内容であったのではないかと推測できる。

国体への賛同の姿勢を明確にする一方、錦織はキリスト者としての自覚から離れることはない。「山陰伝道応援記」では伝道会で決心者8人がいたことを誇りとし、また自身の講演記録として、『祈りは奇跡を生む』の信念に間違の無い事が立証されて、斯うした隠れた祈りがあつた事を知り、聖名をあがめて感謝した事であつた」と記す⁷³。国体への賛同の姿勢と信仰の両立への矛盾の戸惑いやためらいは、錦織の執筆からはみられない。

宗教団体法が施行された1940年には、「森田画伯の同情 夫人をして起たしむ」として、『基督教世界』における錦織の最後の執筆がある。その中では、「輝かしき皇紀二千六百年を迎へる準備にあはたしい、しかも旧臘押迫つたクリスマス」の記述や、「組合教会の婦人たちが零細な金を集めて北支伝道に、支那人医療に、婦人の立場より働きつゝある」、また「皇紀二千六百年を迎へ当会婦人は益々神国建設のため一層邁進せんことを誓つた」等々、ここでも、「皇紀二千六百年」「北支伝道」の言葉が並び、北支における宣教を「神国建設のため一層邁進」させるという確信が見られる⁷⁴。この執筆が、『基督教世界』における錦織の最後の稿となるが、

71 錦織久良子「戦時経済と家庭婦人の役割」（『基督教世界』2856号、1938年12月15日、5-6頁）

72 錦織久良子「山陰伝道応援記」（『基督教世界』2875号、1939年5月8日、8頁）

73 同上

74 錦織久良子「森田画伯の同情 夫人をして起たしむ」（『基督教世界』2917号、1940年2月

これ以降、1949年2月6日に錦織が亡くなるまで、錦織による執筆は『基督教世界』以外においても管見の限り見当たらない⁷⁵。

以上のように、『基督教世界』における錦織の戦時下の執筆には、キリスト者としての自覚を維持しつつ体制をそのまま受け入れる姿勢が見られるが、1920年代以降の日本組合基督教会発行の新聞『基督教世界』で天皇制への迎合が散見される点については、複数の研究が指摘している⁷⁶。例えば茂義樹は、『基督教世界』の傾向全体が「最初は批判的姿勢を持ってこの事件（満州事変：筆者注）に関わる。しかし戦乱が長びくについて国家に協力していく。（中略）教会内部に、戦争体制への積極的協力姿勢があった」⁷⁷とし、特に、1932年6月23日田中左右吉の論説「満州国承認問題」以降、『基督教世界』における論調が戦争協力に一転していることを指摘している⁷⁸。さらに、1935年の今泉真幸の「犠牲的精神の礼讃」、「国家を愛し又万国に比類なき我が尊き皇室の御權威に服せんとする」と述べた山口金作の「国体明徴と至誠奉公」などを取り上げ、「ナショナリズムそのもの」であるとす⁷⁹。また、1937年の渡瀬常吉の「時局と基督教」は「時局へのより積極的な対応を説く」ものであるとし⁸⁰、1938年には、キリスト教が神道、仏教と並んで文部省宗務局から招かれ宗教協議会を開催したことが、「各宗の協力によって東亜の楽土を建設—木戸文相出席の下に三教代表協議会」の見出しで報道されており、同年9

29日、7頁)

75 1950年に出版された三木光爾編『神は近くに』（丁子屋書店、1950年）では錦織の「子供の宗教教育」が所収されているが、これは錦織が生前書き残したものであろう。題名としては「家庭に於ける子供の宗教教育」（『婦人』12-2、1935年12月、5-7頁）に近いが、内容は一部共通しているものの、基本的には異なる内容となっている。錦織が生前書き残していたものを収録したのかもしれない。

76 例えば、茂義樹「1930年代のキリスト教ジャーナリズム—『基督教世界』の場合」（『キリスト教社会問題研究』25号、同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会、1976年12月、47-82頁）；寺崎暹「清水安三と中国—「基督教世界」を廻って」（『キリスト教社会問題研究』40号、同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会、1992年3月、136-187頁）；工藤弘志「戦時下の『基督教世界』を読む—1936年から1941年までの、天皇制および戦争関連記事」（『キリスト教社会問題研究』42号、同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会、1993年7月、25-55頁）

77 茂、前掲論文、51頁

78 茂、前掲論文、54-55頁

79 茂、前掲論文、64-65頁

80 茂、前掲論文、70頁

月23日には「今年の降誕祭について」として「クリスマスにも国民精神総動員の趣旨を『朗読』や『対話』に取入れるよう提案」されていること、さらに1939年以降は「国民精神総動員」が色濃くなり、「八紘一字の精神と基督教」といった内容の記事が増加していると指摘する⁸¹。そして、1940年には紙面が、「紀元二六〇〇年記念行事と、宗教団体の施行、教会合同と日本基督教団の成立が主たるニュース」となると説明する⁸²。茂は、『基督教世界』は「双手をあげて政府と軍部に従」い、その論調を支えたのは、日本組合基督教会の指導者たちであったと指摘する⁸³。

また工藤弘志も、主に1936年から1940年の『基督教世界』から90本の記事を検証し、1937年以降の『基督教世界』の記事は「天皇崇拜と天皇制礼讃が乱舞」し、この傾向が「休刊の一九四二（昭和十七）年の年頭まで間断なくつづく」と記す⁸⁴。

日本組合基督教会でのこのような論調の中、1937年からの宗教団体にに基づく政府からの要望によって、1941年6月24日にはプロテスタント33教派が富田満牧師を教団統理者として日本基督教団として合同し、11部に編成された。組合教会は第三部を構成したことで、解散となり、同年12月8日に真珠湾攻撃によって太平洋戦争が始まった。

上記にも指摘されているような、1932年以降の『基督教世界』に掲載された日本組合基督教会の指導者たちの見解、また特に1930年代後半における天皇制、国粹主義の高揚と、『基督教世界』における錦織の執筆の論調とはまさに一致している。『基督教世界』の記事を丹念に追った茂や工藤の研究では、日本組合基督教会は日本基督教団合同以前から天皇制への批判的態度がないとの評価を下しているが、その中にいた錦織の『基督教世界』誌上の執筆もまた、同時代の組合教会の姿勢とその後の戦時下の日本基督教団の体制の反映であるといえる。戦争期以降、錦織の執筆には、国家の体制への従順な姿勢、銃後の婦人としての明確な自覚、北支伝道への全面的肯定といった視点が明確になる。錦織自身が批判的視点を持たず、自身の属する教団、またキリスト教界全体の姿勢をそのまま受け入れていることがわかる。

錦織は、男性の作り上げた男性中心社会に反発し、20代半ばであった1910年代から戦争体制下になる1930年代後半に至るまで一貫して、家庭における男女の権

81 茂、前掲論文、72-73頁

82 茂、前掲論文、76頁

83 茂、前掲論文、77頁

84 工藤、前掲論文、27頁

利や立場の平等を提唱し続けていた。一方で、非常時の時局において、男性が中心となって指導する教会の体制、また国家の体制の中では、従順な信徒また従順な国民として体制に従った。ここには、男性中心社会に反発しながらも、結果的には男性が中心となって作り上げた教会の体制また社会の体制に従順であるという矛盾があるようにみえる。しかしそれは、果たして矛盾だろうか。短歌や宗教文芸からみられる錦織の信仰観は、私的生活領域における倫理的側面への言及に留まっていた。さらに女性の権利の主張においても、家庭内での男女の平等に関心が置かれていた。これが戦時体制の中では、私的領域としての家庭における「銃後の婦人」の強調へと矛盾なくすり替わっていった理由ではなかっただろうか。

錦織が残した戦後の執筆は現時点では見当たらない。「銃後の女性」としての確信を訴えた錦織が、戦後自らの発言をどのように振り返ったのかを検討するために、錦織による執筆の発見が望まれる。

結

本稿では『基督教世界』における錦織の執筆 161 件を中心に、錦織の信仰観と女性観の一端を検討しながら、宗教文芸家としての錦織が、次第に体制に合わせた銃後の婦人としての自覚を持つに至る過程を明らかにした。

大正期から昭和初期の比較的穏やかな社会状況であり、日本でキリスト教が拡大し、女性の人權に関する関心が高まった時期には、錦織は家族とのやりとりなどの身近な日常を短歌として詠んだり、創作や外国文学の再話を通して一キリスト者としての私的領域における倫理的な生き方を推奨したり、また家庭内での男女の平等を主張した。

しかし 1930 年代後半以降、日本全体が戦時下に置かれ、錦織の属する日本組合基督教会も体制への迎合の姿勢が見られる中、錦織自身もまた銃後の婦人としての明確な自覚を持ちつつ国体への従順と教会への従順という二重の従順の姿勢を貫いていたことが明らかになった。錦織の中で、自然の創造主である神への賛美と、中国における日本の占領に伴う北支キリスト教伝道への熱心と、さらには軍国主義国家の中での良き国民としての徹底した銃後の婦人の自覚は、全てが矛盾することなく共存していた。これは、婦人運動の活動家として男性中心社会への批判的視点を持つ一方で、結果的にはその男性が中心になって作り上げた体制への従順という矛盾を孕むようにもみえる。しかし実際には、これらは全て家庭内における一個人と

しての生き方、という点では矛盾していない。錦織にとっての信仰観や女性観が、社会における意義が十分に吟味されることなく、自己と家庭周辺のみで完結していたためだと評価できるだろう。

錦織は1932年以降、全関西での政治・法律部長となり、全関西の毎年の大会では10年以上にわたって司会者を務めるなど、同団体の中心的役割を担う。『基督教世界』にも限定的ながらも寄稿される女性問題への言及は、全関西婦人連合会機関誌『婦人』では、より明確な形で示される。キリスト者だけではなく、むしろ非キリスト者を主な読者層とした『婦人』での錦織の執筆を中心として、1930年代の女性活動家としての、またキリスト者としての錦織の評価を次の研究課題としたい。

付記：錦織久良による『基督教世界』寄稿種別数⁸⁵

年	種別	寄稿数	寄稿数合計
1916	短歌	2	2
1917	短歌	5	5
1918	短歌	9	11
	婦人問題への提言	2	
1919	短歌	9	9
1920	短歌	5	5
1921	短歌	9	9
1922	短歌	6	7
	書籍紹介	1	
1923	短歌	6	8
	創作	1	
	女性問題への提言	1	
1924	短歌	6	7
	随筆	1	
1925	短歌	7	12
	創作	2	
	随筆	3	
1926	創作	2	3
	随筆	1	

85 歌については、数首が収録されている場合でも、1回の寄稿で1件と数える。歌の選者の場合も1件として数える。

1927	短歌 創作	4 19	23
1928	短歌 創作	2 22	24
1929	短歌 創作	4 1	5
1930	短歌 創作	7 1	8
1931	短歌	9	9
1932	短歌 歌集紹介	1 1	2
1933		0	0
1934	随筆	1	1
1935	女性問題への提言	1	1
1936	短歌	1	1
1937	随筆	2	2
1938	随筆 女性問題への提言	1 1	2
1939	随筆 女性問題への提言	2 1	3
1940	創作 随筆	1 1	2
	合計		161